コラム
歴史に学ぶ

鉄砲の種子島から全国への拡散　その②
～～薩摩・豊後への伝播～～

西之表市立図書館長　鮫嶋　安豊

今回は種子島から①薩摩（鹿児島）②豊後（大分）への伝播を探った。

①　薩摩（鹿児島市）への伝播

種子島の鉄炮鍛冶元祖八板家の系図（要所のみ）を略記する。

初代清　定（１５０２～１５７０）

２代清賀（きよよし）（１５３１～１５９８）

家　清（１５７０～１５９２）　清賀の弟

３代清　實（１６００～１６２８）

２代康　清（１５９２～１６１５）　藤　八

松方正勝（薩摩）が弟子入り

（以下略）・・・

３代康重・・・・

八板清定一流は鉄砲伝来から明治時代まで１４代続き、種子島の鉄炮惣鍛冶役を務めた家系で代々「清」を名乗る。２代清賀(きよよし)は鉄砲伝来時、僅か１２歳、その弟「家清」は分家し、家清の子は「康清」で、代々「康」を名乗る。実はこの八板分家筋の２代目「康清」に薩摩（鹿児島）の松方正勝が弟子入りし、「鉄砲製作技術は薩摩へ伝播」と記される。（薩隅日鉄炮鍛冶襍伝）（本藩砲工名譜）

その松方正勝一流系図には「正勝は慶安より正保の初めの人で、慶長の始め、八板藤八康清の門人となり、石見守家清の嫡男から鉄炮製造方法を学び、その名高い存在（名うて・妙手）となった」とある。

さらに児玉家系図によると、児玉實堅（寛永・天和）は初代松方正勝嫡男正辰に弟子入りし、二代實盈（八右衛門）、三代實順（角兵衛）へと九代實函（鉄兵衛）まで続く。その間に、児玉實堅は薩摩藩の兵具奉行の役職に就いている。兎も角、種子島から鉄砲製作技術は薩摩藩内へ伝播したことが明らかとなった。

②　豊後（大分）への伝播

さらに鉄炮は豊後（大分県）へも伝播した。大分県日出町伊東家に残る古文書に種子島からの伝播が見える。「天文１５年２月　藤原村の伊藤八郎・同甚助・同孫二郎らは豊後藩主大友義(よし)鎮(しげ)の命令により、種子島に渡り、鉄砲製作を習い、１１年で製作を成就することが出来た。弘治２年（１５５６）８月に帰村し、大友義(よし)統(むね)（義鎮の子）はこのことを大変悦び、源姓と家紋を與え褒賞した。」と。天文１５年は伝来から３年後で、師匠は八板金兵衛清定、平瀬国清、牧瀬慶清らである。技術は１０年で一人前といわれるが、まさに１１年を要して豊後へ伝播した。新兵器の技術を習得するために、全国各地から、我先にと渡島していたのである。

種子島はまさしく「鉄砲の伝来と国産化」のメッカ（聖地）であったことを忘れてはならない。

八板金兵衛清定・牧瀬慶定・平瀬国清ら刀剣鍛冶の合力で完成した国産第一号銃

令和５年３月 27 日発行　第 12 号　［発行］西之表市［編集］企画課 歴史文化活用係
〒891-3193　西之表市西之表 7612 番地　電話 0997-22-1111（内 280）FAX 0997-22-0295

西之表市史編さんだより

第 12 号

自然部会

魚の宝庫、種子島

本村　浩之（鹿児島大学総合研究博物館）

種子島には何種の魚が生息しているのでしょうか？この問いはとてもシンプルですが、その答えはこれまで知られていませんでした。今回、西之表市史編さん事業をきっかけに、過去の文献を調査するとともに、鹿児島大学を中心にこれまでに実施された種子島の魚類多様性調査の成果を再検討しました。

種子島の魚類多様性に関する研究史は比較的古く、100 年以上前に遡ります。明治 37-38 年にスタンフォード大学の大学院生 R. Anderson 氏が種子島のタイドプールで多くの魚を採集し、アメリカに持ち帰りました。その標本に基づき、明治 39 年に種子島に因んだ学名の *Praealticus tanegasimae*（標準和名タネギンポ）などが新種として記載されました。この報告が種子島における魚類多様性に関する初めての記録となります。その後、明治 41 年には同じく種子島の名を冠した *Callogobius tanegasimae*（タネハゼ）が記載されるなど、現在までに多くの魚が種子島から記録されています。直近では 2023 年 3 月にオオアカムツが種子島産の標本に基づいて日本から初めて記録されました。このような文献記録と鹿大総合研究博物館に保管されていた 1 万点の種子島産標本を調べたところ、種子島に生息する魚類は 1,182 種であることが分かりました。一つの島としては、奄美大島と屋久島に次ぐ国内 3 番目の魚類の種多様性を誇ります。今後、調査を継続することで更なる種の発見が期待されます。

なお、種子島と屋久島は地理的に近接していますが、両島の間には大隅線と呼ばれる魚類における生物地理境界線があります。種子島には分布の南限をしめす種も多く生息しており、それらの種は屋久島には出現しません。今後も種子島の特異的で豊かな魚類多様性を保全するために、基礎的な知見の蓄積を進めていきたいと思います。

←2020 年に西之表港で釣獲されたニホンイトヨリ。1938 年に「ニホン」イトヨリと命名されましたが、当時から日本における記録はありませんでした。2021 年にこの種子島産標本に基づいて初めて日本から記録されました。

写真のご提供　ありがとうございました！

S5 年 鴻之峰小学校尋常科五学年生集合写真
（河野博康さん）

鴨女町沖埋立て工事前の空中写真
（砂坂昭さん）

中世部会

種子島・屋久島の中世城館

吉本　明弘（薩摩川内市川内歴史資料館）

種子島・屋久島（口永良部島含む）には種子島 12、屋久島 9、口永良部島 3 の計 24 の中世城館が確認されています（鹿児島県教育委員会 1987 年『鹿児島県の中世城館跡』）。そのうち、西之表市は 9 で、中世から近世にかけて種子島氏による本城、池田黒山尻城、屋久田城、（住吉城）、本源寺・内城、野首城、内城、赤尾木城の変遷を辿ったとされています。

種子島氏 13 代恵時は屋久田城に拠りますが、天文 12 年（1543）には、大隅半島の祢寝氏が種子島へ進出し、種子島恵時は一時屋久島へ逃れます。屋久島の種子島氏の城には楠川城があります。対する祢寝氏は屋久島を抑えるため、屋久島の宮之浦城ヶ平城や永田城を築きます。城ヶ平城は未完成のまま種子島恵時の反撃にあいます。永田城は大規模な山城ですが、築城途中に種子島氏の反撃にあい、祢寝氏は屋久島からわずか 1 年で撤退します。その後、永田城は祢寝氏の再度の攻撃に備えるために種子島氏による拡張があったとされ、現在の大規模な姿へと変えます。

西之表市では種子島氏の居城のうち、住吉城だけ離れた場所にあります。鹿児島県教育委員会「中世城館分布調査カード」によれば、住吉城には 16 世紀に種子島氏 14 代時堯や 16 代久時が居城したことが記されており、「種子島家譜」の「久時」の項目には時堯旧宅の住吉に居したことが記されています。住吉に移った背景には種子島氏の島南域や屋久島への支配を視野に入れていたものと考えられます。

その後、本源寺、内城と移り、一時期野首城に拠ります。その位置は、字「野首」（近くには字「古城」）が従来の説ですが、「種子島家譜」等に「石ノ峯ト号ス」とあることから、近年では字「石峯」に比定するなど、現在二つの説があります。また、赤尾木城（現榕城小学校）には、江戸時代の寛永元年（1624）に移った＝築城されたとされています。八代城（熊本県八代市）のように慶長 20 年（元和元年/1615）の一国一城令以降における藩主の居城以外の城の築城許可が幕府から下りた例もありますが、実際のところはどうであったのでしょうか。これを解明するには、赤尾木城以前の種子島氏の居城であった内城（旧榕城中学校）とセットで考えていく必要があります。「種子島家譜」にも「内城より上之城（赤尾木城）に移る」と記述があるのみです。地形的に見ると、もともと内城と赤尾木城は同じ城の中の曲輪で、曲輪と曲輪の間を空堀で仕切っていたと考えられます。その考えでいくと赤尾木城は新しく築城したというよりも、既存の曲輪を政庁とするために一部整備し直して、移ったという見方もできるのではないでしょうか。

種子島や屋久島の中世城館は湊を見据えた立地環境となっているといえますが、文献史料の少なさから歴史が分からないものが多いのも現状です。市史では、限られた文献史料の中で、種子島氏や祢寝氏の中世城館の変遷について解明していく予定です。

赤尾木城跡（西之表市）

城ヶ平城跡より宮之浦を望む（屋久島町）

先史部会

海を越えて

西野　元勝（鹿児島県歴史・美術センター黎明館）

西之表市内には，多くの石造物が残されています。石造物とは，石で造られたお墓や神社の祠などのことです。市史の編さんでは，市内にどのような石造物が残されているかを調査しました。

その結果，市内には島外から多くの石造物がもたらされていることがわかりました。最も多いのは，指宿市で採れる山川(やまかわ)石(いし)と呼ばれる黄色い石で造られたものです。石碑や祠など，様々な種類の石造物がもたらされています。この石は，柔らかく加工がしやすいので，美しい飾りが彫られているものもあります。また，熊本県や佐賀県など九州島のものもあれば，兵庫県の六甲(ろっこう)山麓で採れる石で造られたものも見つかりました。

種子島は，九州島や琉球列島など様々な地域と海を越えた交流を行っていました。島外からもちこまれた石造物は，船のバラスト（舟の底を安定させるための重り）や商品（墓石など）としてもちこまれたものもあります。これらの石造物も種子島が他の地域と海を通じて交流していたことを証明するものといえます。

柳田来鳳の墓石

↑指宿市で採れる山川石と言われる溶結凝灰岩（ようけつぎょうかいがん）で造られています。黄色い色が特徴です。

↓佐賀県で採れる玄武岩（げんぶがん）というとても堅い石で造られています。少し紫がかった灰色が特徴です。

御拝塔墓地の墓石の一部（相輪）

御坊墓地の墓石（五輪塔）

↑兵庫県の六甲（ろっこう）山麓で採れる花崗岩（かこうがん）という石で造られています。通称御影石（みかげいし）とも言われています。全体は白色で、ピンク色の粒子を含みます。小型品が多いです。

↓熊本県で採れる阿蘇溶結凝灰岩（あそようけつぎょうかいがん）という石で造られています。ややピンクがかった色が特徴です。

鉄砲館中庭の層塔

市史編さん事業の経過（１月以降）

- １月 11 日～12 日　市内の石造物調査
- １月 13 日～15 日　近世部会 資料調査
- １月 15 日　田之脇集落 破魔祈祷
- １月 30 日　第２回市史編集委員会
- １月 31 日～２月１日　古代近世部会 史跡巡見
- ２月 19 日～21 日　中世部会 城跡調査
- ３月９日～10 日　下野敏見氏資料の梱包、搬出
- ３月 14 日　第２回市史編さん委員会
- ３月 27 日　編さんだより第 12 号発行

市内の石造物調査

江戸時代以前に作られた石造物の調査を続けています。１月の調査では、日典寺や下石寺、深川神社などを訪れました。

田之脇集落の破魔祈祷

悪疫退散や無病息災を願う破魔祈祷を見学しました。「ちんちょう」と呼ばれるワラで編んだ的を弓矢で射当てました。